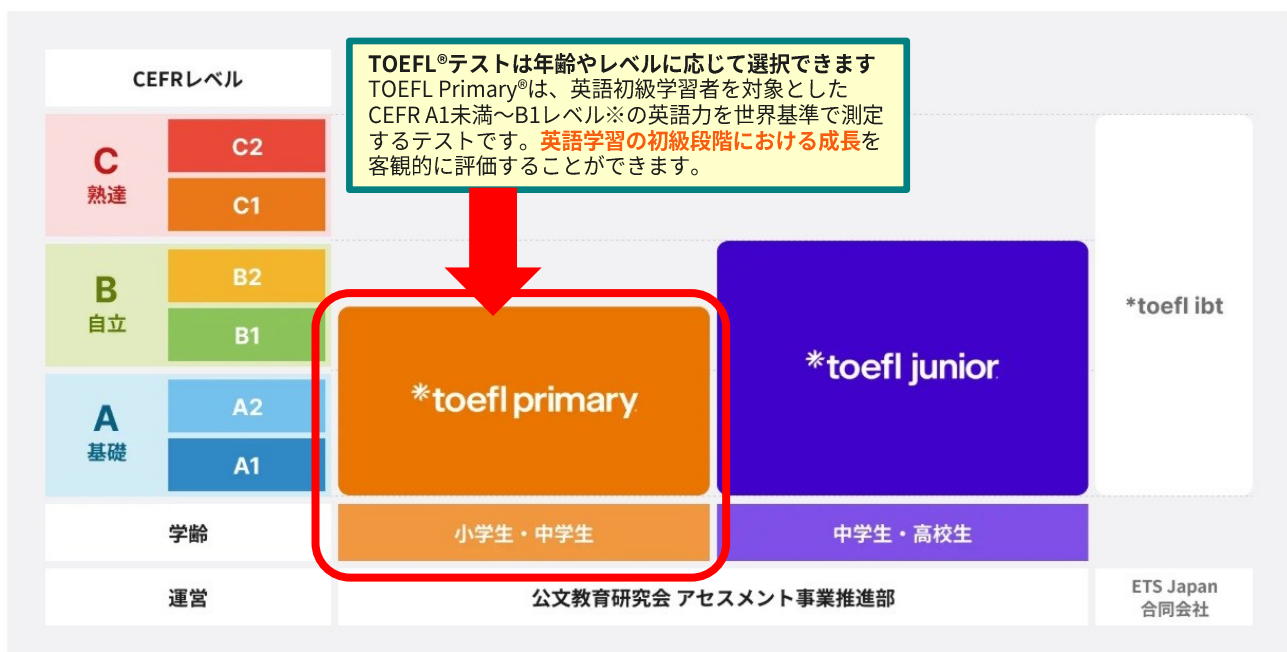


市町村教育委員会関係者、および、
小学校・中学校英語科先生対象

学習指導要領で求められている 指導力・学習効果のために **TOEFL Primary®** のスコアを活用する理由と価値について

京都教育大学附属京都小中学校 英語科主任
ETS公認TOEFL Primary® / TOEFL Junior®トレーナー
メタメトリックス公認レクサイルエデュケーター
一般社団法人国際教育英語試験協会 理事
今西 竜也

CEFRとの対応



© 2017 Kumon Institute of Education Co., Ltd. (<https://www.toefl-junior-primary.jp/about/>)

目次

1. 学習指導要領で求められている英語力と指導	p.2
1.1. 児童・生徒の英語力～どのような力をつけなければいけないか～ . . .	p.2
1.2. 児童・生徒の英語力をつける指導 ～どのような指導が求められているのか～ . . .	p.3
2. TOEFL Primary®が測定する「英語運用能力」とは	p.4
2.1. 世界基準のテスト	p.4
2.2. 他のテストとの違い	p.6
3. TOEFL Primary®のスコアの活用と授業デザイン	p.8
3.1. TOEFL Primary®のスコアの活用方法	p.8
3.1.1. 学習者本人へのフィードバック	p.8
3.1.2. 教師による指導改善	p.8
3.1.3. 学校全体でのカリキュラム改善	p.8
3.1.4. 保護者への説明と協力	p.9
3.1.5. 小学校と中学校の接続	p.9
3.2. 具体的な授業デザインと指導方法	p.9
3.2.1. リーディング指導	p.9
3.2.2. リスニング指導	p.10
3.2.3. 学習形態の工夫	p.10
3.2.4. 授業事例	p.10
4. 小中接続期におけるTOEFL Primary®受験の価値	p.11
4.1. 生徒の現状の把握と目標の設定	p.11
4.2. 中学校卒業時までの英語指導のあり方	p.12
5. まとめ	p.13

1.学習指導要領で求められている英語力と指導

小学校から中学校にかけての英語教育は、単なる語彙や文法の習得にとどまらず、児童・生徒が英語を「理解し」「活用する」ことを通じて実際のコミュニケーション能力を育成することを目的としている。学習指導要領では、聞く・読む・話す(発表・やり取り)・書くの4技能5領域を統合的に学習させることが強調されており、児童・生徒が自分の考えや気持ちを相手に伝えたり、相手の意図を的確に理解したりする力を段階的に養うことが求められている。本章では、まず児童・生徒にどのような英語力が求められているのかを確認し、続いて、その力を育成するために教師にどのような指導が求められるのかを検討する。

1.1. 児童・生徒の英語力～どのような力をつけないといけないか～

小学校学習指導要領(外国語活動・外国語科)(※1)では、高学年において「聞くこと」「話すこと」を中心とした言語活動を通じて、児童が外国語によるコミュニケーションの基礎に慣れ親しみ、簡単な情報や考えをやり取りできる力を養うことが求められている。

さらに、児童が身近な出来事や自分の気持ちを伝えたり、相手の意図を理解したりする経験を重ねることによって、外国語を用いたコミュニケーションに対する積極的な態度を育成することが重視されている(学習指導要領[小学校編]第5学年及び第6学年・外国語活動の目標)。

これを受けて、中学校学習指導要領(外国語科)(※2-次のページ)では、「英語を理解し、英語で表現できる実践的なコミュニケーション能力の素地を養うこと」が明記されている(学習指導要領[中学校編]外国語科・目標)。また、言語活動を通じて「情報を捉え、抽出し、活用して自分の考えや気持ちを伝える力」を育成することが求められており(同・内容の取扱い)、児童期に培った基礎をさらに発展させ、より精緻な英語運用能力を高めることが意図されている。

このように、小学校から中学校にかけて系統的に育成される「英語を理解し、使う力」は、単なる知識習得ではなく、実際のコミュニケーション場面でどの程度活用できるかに焦点が当てられるべきである。

(※1) 小学校指導要領で求められる4技能5領域の内容

聞くこと	音声やイントネーションに慣れ、身近な語句や表現を聞いて大まかな内容を理解する。
読むこと	簡単な単語や短文を、絵や状況と結びつけて理解する。
話すこと(やりとり)	簡単な質問や応答を通して、身近なことや気持ちをやり取りできる。
話すこと(発表)	身近な出来事や自分の気持ちを、短い文や表現を組み合わせる伝える。
書くこと	既習の語句や表現を使い、簡単な文を書ける。

(※2) 中学校指導要領で求められる 4 技能 5 領域の内容

聞くこと	日常的・学習的な題材を聞き取り、大意や要点、話し手の意図を理解する。
読むこと	身近な題材や社会的内容の文章を読み、要点や必要な情報を取り出す。
話すこと（やりとり）	相手の発話に応じて会話を続け、自分の考えや感想を理由を添えて述べられる。
話すこと（発表）	自分の考えや調べたことを、論理的に整理して発表できる。
書くこと	自分の考えや気持ちを、まとまりのある文章として書ける。

1.2. 児童・生徒の英語力をつける指導～どのような指導が求められているのか～

児童・生徒に求められる英語力を育成するためには、学習指導要領の趣旨に基づいた聞く・読む・話す・書くの統合的な言語活動を中心とする指導が不可欠である。単なる知識や文法事項の伝達にとどまらず、児童・生徒が英語を理解し、実際のコミュニケーションに生かす経験を積めるように授業を設計することが、教師に求められる役割である。

小学校段階においては、児童が英語に慣れ親しみ、簡単な内容を聞いて理解し、短い表現を使って応答する指導が重要である。たとえば、教師の指示(Draw a circle. / Take out your pencil case.)を聞いて行動する、絵本やイラスト付きの会話を見て意味をつかむ、といった活動である。こうした活動を通じて、児童は音声を手がかりに内容を理解し、それをもとに短いフレーズで返答する力を養う。また、自分の好きなものや気持ちを短く伝える(I like dogs. / I'm happy.)活動を組み合わせることで、理解と表現の往復を体験できる学習環境を整えることが求められる。

一方、中学校段階においては、小学校で培った基礎を発展させ、やや複雑な情報を読んで理解する力・聞いて理解する力を伸ばし、それを踏まえて自分の考えを伝える指導が必要である。たとえば、友達が週末にしたこと(I went to Kyoto last Sunday.)を聞いて内容を理解し、それに応答(That's nice. I studied at home. Did you enjoy sightseeing?)する活動や、短い案内文を読んで場所や時間を確認し、自分の行動を計画するといった活動である。さらに、意見交換の場面では、理由を添えて自分の考え(I like soccer because it's exciting.)を述べることを指導し、理解した情報を活用して思考を伴う表現につなげる力を育成することが重視される。

このように、小学校では「聞いて理解する」「見て理解する」といった基礎的理解活動を出発点とし、中学校では「情報を整理・活用する」理解活動へと発展させながら、表現力につなげていく段階的な指導が求められる。教師はその系統性を踏まえ、児童・生徒が学習指導要領に示された目標を達成できるよう一貫した学習機会を提供する必要がある。

2. TOEFL Primary®が測定する「英語運用能力」とは

前章で確認したように、学習指導要領が重視しているのは、単なる語彙や文法の知識ではなく、児童・生徒が実際のコミュニケーション場面で英語を理解し、活用する力である。この力を的確に測定し、学びの成果や課題を客観的に把握することは、指導改善や児童・生徒自身の学習意欲につながる。しかし、従来日本で広く利用されてきた英語テストは、必ずしもこのような力を国際的な基準で測ることを目的としていない。

そこで注目されるのが、TOEFL Primary®である。本章では、まず TOEFL Primary®が「世界基準のテスト」としてどのように設計されているのかを確認し、続いて英検®やGTEC®と比較することで、その独自の価値を明らかにする。

2.1. 世界基準のテスト

TOEFL Primary®は、米国の教育機関であるETS(Educational Testing Service)が開発した、世界の小学生・中学生を対象とした英語能力評価テストである。TOEFL®(Test of English as a Foreign Language)が世界的に認知された英語能力試験として長年活用されてきた実績を基盤に、小中学生の発達段階に合わせて設計されたものである。

開発にあたっては、英語を母語とする国や州のカリキュラム、また英語を第二言語として学ぶ国の教育課程を参照しており、日本の学習指導要領だけに依存していない。そのため、テストで出題される場面は「**学校生活**」や「**日常のやり取り**」(※3)といった児童・生徒にとって身近な文脈で構成されており、実際の生活で英語を理解・活用する力を確認できるようにになっている。

(※3) 「学校生活」や「日常のやりとり」の例

「TOEFL Primary®テスト公式問題集 Step 1」(くもん出版2026)より設問例

タイプ2 Listen to Directions サンプル問題



Track 02

The test takers hear: (受験者は音声を聞きましょう)

Narrator: Listen to a teacher.

Man: OK, everyone. It's almost time for lunch. Please bring me your papers.

Narrator: What did the teacher tell the students to do?

The test takers see in their test books: (受験者は問題用紙を見ましょう)



(A)



(B)



(C)

答え

(A)

先生は「もうすぐ昼食の時間です。紙を持ってきてください。」と言います。したがって、女の子が先生に書類を持ってきている(A)が正解です。(B)では、女の子は紙に書いてはいますが、先生に渡していないので誤りです。(C)では、女の子は袋を持って教室を出て行きますが、紙で何かしているわけではないので、(C)も不正解です。

音声の訳

ナレーター：先生の話聞いてください。

男性：では、みなさん。もうすぐ昼食の時間です。紙を持ってきてください。

ナレーター：先生は生徒たちに何をするように言いましたか？

「非売品データ版 TOEFL Primary®/ TOEFL Junior®模擬テスト」(一般社団法人教育英語試験協会 2025)より設問例

M: There's something very important that happened on the news today. Please close all your books and notebooks, and then look up at the screen. You don't need to put your books in your backpack. After watching the news, we will have a ten minute break.

M: 今日、大変重要なニュースがあります。すべての本とノート閉じてスクリーンを見てください。本をカバンにしまう必要はありません。ニュースを見た後、10分間の休憩を取ります。



(A)



(B)



(C)

答:B

M: Ruthie, remember what the dentist said? Brushing your teeth before bed every night is very important. But you should also do it in the morning. So, don't forget to do that after finishing your breakfast.

M: Ruthie、歯医者さんの言ったことを覚えている？毎晩寝る前に歯磨きをすることはとても大切だよ。でも、朝も歯磨きをしないとイケないよ。だから朝食のあとの歯磨きを忘れないで。



(A)



(B)



(C)

答:B

このような背景から、TOEFL Primary®は児童・生徒の英語力を「国際的に比較可能な基準」で評価できるという大きな特徴を持つ。テスト結果はCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)に準拠したレベルで示され、単なる語彙や文法の知識量ではなく、「どのような英語を、どのような場面で使えるか」という観点で能力を把握することができる。

実際に測定されるのは、主にリスニング(聞いて情報を理解する力)とリーディング(読んで意図をつかむ力)であり、学習指導要領が重視する「英語を理解し、活用する力」とも一致している。これにより、児童・生徒が授業を通じて培った英語運用能力が、国際的な水準でどの程度到達しているかを客観的に確認できる。

2.2. 他のテストとの違い

日本の学校現場で広く活用されている英語テストとして、最も認知度が高いのは英検®(実用英語技能検定)である。英検®は長い歴史を持ち、入試や資格の加点要件としても定着している。一方で、英検は合格・不合格という資格試験的な性格が強く、「合格＝到達」「不合格＝未到達」と判断されやすい側面がある。合否が明確であることは分かりやすい反面、学習の途中段階にある児童・生徒にとっては「不合格＝全否定」と受け取られる危険性もある。学習指導要領が重視する「段階的な育成」に照らせば、到達度を細かく確認し、伸びを実感できる評価の仕組みが望ましいといえる。

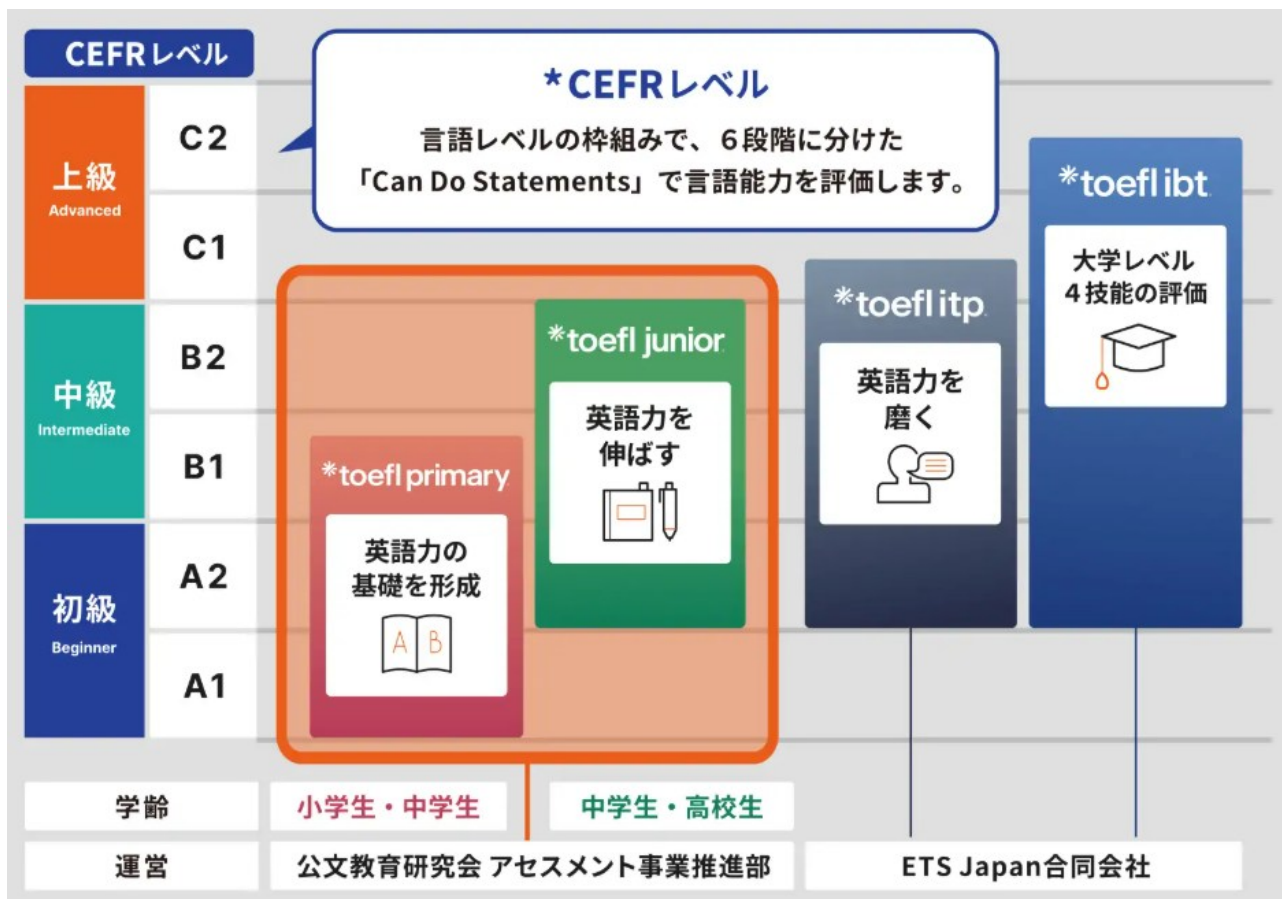
これに対し、GTEC®(ベネッセコーポレーション)は、スコア型で結果が示されるため、合否ではなく「どの領域がどの程度伸びたか」を確認できる点に特色がある。ただし、主に中高生を対象

としており、小学生や中学校初期段階の英語力を測るには十分に適合しているとはいえない。またGTEC®は日本国内で開発・運用されているため、国際的な比較基準というよりは「国内での到達度把握」に軸足を置いたテストである。

TOEFL Primary®は、英検®のように合否で区切るのではなく、GTEC®のようにスコアで細かく結果を示す。さらにそのスコアは、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)を基準に換算され(※4-次のページ)、世界の小中学生との比較が可能な国際的指標として位置づけられている。つまり、英検®の「資格試験としての強み」とGTEC®の「スコアによる成長の見える化」をあわせ持ちつつ、国際基準に基づく比較可能性という独自の価値を備えている。

このように、英検®・GTEC®との比較を通して見えてくるのは、TOEFL Primary®が「単なる合否判定ではなく」「国内に閉じない」評価を提供するテストであるという点である。児童・生徒が自らの成長を実感し、教師が国際的な基準で指導成果を確認できるこそが、その大きな特長である。

(※4) CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)を基準に換算



© 2017 Kumon Institute of Education Co., Ltd. (<https://www.toefl-junior-primary.jp/>)

【TOEFL Primary®/TOEFL Junior® 活用事例】

「TOEFL Primary®/TOEFL Junior®」を導入した理由～慶應義塾普通部の英語教育

慶應義塾の一貫教育で前期中等教育課程を担う男子中学校である慶應義塾普通部の跡部智先生に、同校が目指す英語教育、英検からTOEFL®へ移行した狙いについて聞いた。

現場の声から探る「TOEFL Junior®」の効果と期待 茨木高校の実践

大阪府のGLHS(グローバルリーダーズハイスクール)10校のひとつで府内屈指の進学校である茨木高校の高江洲良昌校長(※取材当時)、ならびに英語科の先生方に同校の英語教育や「TOEFL Junior®」の活用などについて話を聞いた。

お話を伺った先生
—— 先生、慶應義塾の英語教育について教えてください。
—— 慶應義塾は、英語教育に力を入れています。特に、TOEFL Primary®/TOEFL Junior®を導入した理由について、先生に伺いたいです。
—— TOEFL Primary®/TOEFL Junior®を導入した理由は、英語教育の質を向上させるためです。特に、前期中等教育課程を担う男子中学校である慶應義塾普通部の英語教育について、先生に伺いたいです。
—— TOEFL Primary®/TOEFL Junior®を導入した理由は、英語教育の質を向上させるためです。特に、前期中等教育課程を担う男子中学校である慶應義塾普通部の英語教育について、先生に伺いたいです。

現場の声から探る「TOEFL Junior®」の効果と期待…茨木高校の実践
大阪府のGLHS(グローバルリーダーズハイスクール)10校のひとつで府内屈指の進学校である茨木高校の高江洲良昌校長(※取材当時)、ならびに英語科の先生方に同校の英語教育や「TOEFL Junior®」の活用などについて話を聞いた。
—— 先生、茨木高校の英語教育について教えてください。
—— 茨木高校は、英語教育に力を入れています。特に、TOEFL Junior®を導入した理由について、先生に伺いたいです。
—— TOEFL Junior®を導入した理由は、英語教育の質を向上させるためです。特に、前期中等教育課程を担う男子中学校である慶應義塾普通部の英語教育について、先生に伺いたいです。



3. TOEFL Primary®のスコアの活用と授業デザイン

TOEFL Primary®は、学習指導要領が掲げる「英語を理解し、活用する力」を測定できる国際基準のテストである。しかし、テストの意義は受験そのものにあるのではなく、その結果を教育実践へどのように結びつけるかにある。スコアは、児童・生徒の学習到達度を客観的に示すだけでなく、学習者本人にとっての成長の実感、教師にとっての授業改善の手がかり、学校全体にとっての教育課程の検証資料、さらには保護者にとっての学習支援の指針となる。つまり、スコアを単なる数値で終わらせず、教育のさまざまな場面で生かすことこそが、TOEFL Primary®を導入する最大の価値である。

3.1. TOEFL Primary®のスコアの活用方法

TOEFL Primary®のスコアは、単なる「点数」ではなく、児童・生徒・教師・保護者・学校それぞれにとって有効に活用できる教育的資源である。ここでは、その主な活用方法を整理し、具体的に解説する。

3.1.1. 学習者本人へのフィードバック

まず最も大切なのは、スコアを児童・生徒本人が自分の成長を実感する手がかりとすることである。TOEFL Primary®はスコアで細かく到達度を示すため、たとえ一度の受験で高得点に至らなくても「前回より聞き取りができるようになった」「読解のスコアが伸びた」というように、努力の積み重ねを肯定的に捉えることができる。

特に小学生・中学生段階の学習者にとっては、結果を「できる／できない」ではなく「ここまでできる」と示すことが、学習意欲

の維持につながる。児童・生徒が自らスコアレポートを見ながら「次はここを頑張ろう」と考える習慣を持つことは、主体的な学びを育む第一歩となる。

3.1.2. 教師による指導改善

TOEFL Primary®のスコアは、教師にとって授業改善のための客観的なデータとなる。スコアレポートには、各技能ごとに「できること」が具体的に示されているため、教師は生徒の得意・不得意を把握しやすい。

例えばリスニングのスコアが低い生徒が多い場合、授業全体で聞く活動の割合を増やすといった改善が可能になる。また、あるクラスでリーディングの平均スコアが高い一方でリスニングが低い場合、そのクラスの傾向を踏まえて指導法を工夫できる。スコアを基にした授業設計は、教師の経験や勘に頼る指導から脱却し、データに裏付けられた教育実践へと導く。

3.1.3. 学校全体でのカリキュラム改善

個々の教師だけでなく、学校全体でスコアを分析することによって、学年や学級を超えた課題が見えてくる。学年ごとの平均スコアを比較すれば、小学校から中学校への接続で生じる「つまずき」が浮き彫りになる。また、毎年のスコアを追跡すれば、学校全体での英語教育の進捗を確認でき、教育委員会や保護者に対して説明責任を果たすことも可能となる。

このようにTOEFL Primary®のスコアは、学校評価やカリキュラムマネジメントの一環として活用でき、組織的な教育改善に資する

点でも意義が大きい。

3.1.4. 保護者への説明と協力

スコアレポートは、保護者との信頼関係を築くツールとしても有効である。従来、保護者への説明は「授業での様子」や「テストの点数」に限られることが多かったが、TOEFL Primary®では国際的な基準に基づいた評価を提示できるため、子どもの英語力を客観的に理解してもらえる。

また、スコアを通して「この力は伸びています」「ここに課題があります」と具体的に示すことで、保護者が家庭での学習をどのように支援すればよいかを共有できる。保護者にとっても「努力の成果が数字で見える」ことは安心感につながり、学校との協力関係を深める契機となる。

3.1.5. 小学校と中学校の接続

最後に重要なのが、小中接続における活用である。小学校修了時のTOEFL Primary®スコアをもとにすれば、中学校入学時点での英語力を客観的に把握できる。これにより、中学校では児童の実態に応じた指導をスタートさせることができる。さらに、中学校卒業時の到達目標と比較して「どこまで伸ばせばよいか」を明確にし、3年間の学習計画を立てやすくなる。小学校と中学校の接続期における実施のメリットについては後にも述べる。

このようにTOEFL Primary®は、学習のスタートラインとゴールをつなぎ、児童・生徒の成長を縦断的に支える指標として活用できる。

3.2. 具体的な授業デザインと指導方法

TOEFL Primary®のスコアレポートは、単

に数値を示すだけでなく、各スコアごとに「このレベルの児童・生徒はどのような活動ができるか」というCan-do記述を伴っている。この情報を授業計画に活かすことで、教師は児童・生徒の実態に応じた具体的な学習活動を設計できる。本節では、リーディング・リスニングの指導、学習形態の工夫、そして実際の授業事例という4つの観点から、TOEFL Primary®スコアを基盤にした授業デザインのあり方を検討する。

3.2.1. リーディング指導

リーディングにおける授業デザインは、スコアによって段階的に整理することができる。Below A1レベルの児童には、イラストや音声付きの絵本を用い、文字を読むことに抵抗感を持たせない工夫が求められる。絵と音声を手がかりに、登場人物や出来事を一文で説明させる活動は、理解と表現を結びつける第一歩となる。

A1レベルでは、短い物語や会話文を教材とし、読んだ内容を口頭で確認する活動が効果的である。例えば、登場人物が誰とどこへ行ったのかを答えさせたり、内容に合った絵を選ばせたりすることで、理解度を確認できる。

A2レベルに達した生徒には、自然科学や社会的な題材を取り入れた少し長めのテキストを扱い、要点をまとめる練習を行わせる。背景知識と関連づけて理解させることで、思考を伴う読解力が育成される。

さらにB1レベル以上の生徒には、物語や説明文を読ませたうえで、内容を自分の言葉で要約したり、意見や感想を述べたりさせる活動が求められる。レビューを書かせて発表するなどのアウトプット活動を組み込むこと

で、学習指導要領が重視する「思考・判断・表現」を伴ったリーディングへと発展させることができる。

3.2.2. リスニング指導

リスニング指導もスコアに応じて段階的に展開することができる。Below A1レベルの児童には、歌やチャンツ、TPR(Total Physical Response)を取り入れ、身体を動かしながら音声に親しむ活動を中心に据える。これにより、意味と音声の結びつきが自然に強化される。

A1レベルの生徒には、短い会話や教師からの指示を聞き取って反応する練習が有効である。例えば「Please open your book.」といった指示を聞いて即座に動作をとることで、リスニングと行動の連動が促される。

A2レベルでは、簡単な物語やニュースを聞き、その概要をメモに取らせる活動が適している。ディクテーションやシャドーイングを取り入れることで、聞き取れなかった部分に意識を向けさせ、語彙や文法の定着を図ることができる。

B1レベルの生徒には、スピーチや映像教材を使い、要旨を自分の言葉で説明させたり、聞いた内容についてディスカッションを行わせたりすることが求められる。これにより、リスニングの理解と発信活動をつなげ、学習指導要領が掲げる「実践的コミュニケーション能力の素地」を養成できる。

3.2.3. 学習形態の工夫

TOEFL Primary®のスコアを活用した授業デザインでは、個別最適化と協働的学習の両立が重要である。スコアレポートを活用して個々の生徒に適した課題図書やリスニング教

材を提示すれば、児童・生徒は自分のレベルに合った挑戦を通して学習を深めることができる。一方で、異なるレベルの生徒をペアやグループに組ませることで、相互に学びを共有・説明する場が生まれる。例えば、リーディング課題を終えた後、理解度の高い生徒が他の生徒に内容を説明する活動は、双方にとって理解を深める機会となる。

さらに、定期的にTOEFL Primary®を受験し、その結果をポートフォリオとして蓄積することで、児童・生徒自身が自分の成長曲線を確認できる。教師はこの情報をもとに授業を調整し、保護者も学習の進展を客観的に把握できる。これにより、学校・家庭・児童が一体となった学習支援のサイクルを確立できる。

3.2.4. 授業事例

最後に、スコアを基盤とした授業実践の一例を挙げる。小学校6年生でBelow A1やA1レベルにある児童には、Lexile指数に対応した絵本を与え、読み終えた後に登場人物について一文で説明させる活動を行う。これは「読む力」と「簡単な発表」を結びつける活動であり、理解と表現の往復を自然に体験できる。

中学2年生でA2レベルの生徒には、簡単なニュース記事を教材とし、要点を三文程度でまとめる活動を行わせる。クラス全体で発表・共有すれば、情報を取捨選択しながら自分の言葉で伝える力が養われる。

さらに中学3年生でB1レベルの生徒には、TED-Edの短い動画をリスニング教材として活用し、その内容をグループごとにまとめて発表させる。こうした活動は、リスニング理解力の強化と同時に、協働的に情報を整理し表現する力を伸ばすことにつながる。

TOEFL Primary®のスコアは、リーディングとリスニングを中心に児童・生徒の英語力を国際基準で可視化するものであり、その結果は授業デザインに直結する。教師はスコアを手がかりに、段階的な学習活動を構成し、個別最適化と協働的学習を組み合わせること

で、生徒一人ひとりの成長を支えることができる。授業事例に見られるように、スコアを基盤とした学習は「理解から表現へ」という学習指導要領の理念を具現化し、児童・生徒が自らの成長を実感しながら英語学習に取り組む姿勢を育む。

4.小中接続期におけるTOEFL Primary®受験の価値

小学校から中学校への移行は、児童・生徒の英語学習において最初の大きな節目である。小学校高学年では、主に「聞くこと」「話すこと」を通じて外国語に慣れ親しみ、簡単なやり取りや自己表現を経験することが重視される。一方、中学校では、リーディングやライティングも含めた4技能の統合的な学習が本格的に始まり、内容や活動の複雑さも一段と増す。このため、小学校で培った基礎が十分に発揮されないまま中学校の学習に進むと、生徒がつまずきを感じやすく、英語学習への意欲低下につながる恐れがある。したがって、この接続期において、生徒一人ひとりの現状を客観的に把握し、今後の学習の方向性を明確にすることは、学習意欲を高め、英語力の持続的な伸長を支えるために欠かせない。TOEFL Primary®はまさにこの接続期での活用に適した評価ツールであり、生徒の現在地と到達すべき目標を国際基準で示すことができる。

4.1. 生徒の現状の把握と目標の設定

小中接続期に求められるのは、入学直前の診断と、授業で使用する教科書本文の準備の精緻化である。TOEFL Primary®はリスニング・リーディングの理解技能を具体的に可視

化し、CEFR換算で現在地を明示する。さらに、スコアレポートに含まれるLexile指数は、生徒の読解力と教科書本文の難度を事前に照合する手がかりとなる。平均Lexileが本文を下回る場合は語彙導入や易しい多読を組み込み、上回る場合は発展的な読本で挑戦度を調整するなど、入学前に授業の負荷を調整する準備が可能になる。こうした「事前対策」によって、授業開始時の理解のギャップを小さくし、安心して中学校の学習に移行できる環境を整えられる。

さらに、語彙面から見てもTOEFL Primary®は学校現場での活用価値が高い。例えば、ETS公式模擬テストに登場する正答を導く489語を基準に検討すると、小学校3・4年で用いる「Let's Try」ではその約4割、小学校高学年の教科書では6割弱、中学校の教科書では8割以上がカバーされている。**(※5-次のページ)**つまり、小学校から中学校にかけて教科書を通じて学ぶ語彙の多くがTOEFL Primary®に反映されており、接続期での診断や目標設定に直結することがわかる。単に「語を知っている」ことではなく、それを「聞いて理解し、使える」段階まで発展させる必要があるという点で、TOEFL Primary®の診断的役割は重要である。

(※5) TOEFL Primary® Step 1 公式模擬テストにおける正答のための単語と各教科書がカバーする割合

	リーディング	リスニング	全体	期待される スコア
小3・4年 Let's Try	39.5% (87 語/231)	41.1% (106/258 語)	39.5% (193/489 語)	
小5・6年東京書籍	58.0% (134/231 語)	59.7% (154/258 語)	58.9% (288/489 語)	206～211 (CEFR A1)
小5・6年三省堂	55.0% (127/231 語)	56.6% (146/258 語)	55.8% (273/489 語)	
中学校東京書籍	84.4% (195/231 語)	84.5% (218/258 語)	84.5% (413/489 語)	212～217 (CEFR A2)
中学校三省堂	85.7% (198/231 語)	86.8% (224/258 語)	86.3% (422/489 語)	

加えてTOEFL Primary®のスコアは、「どの場面でどの程度理解できるか」を明示する診断的機能を持つ。例えば、リスニングでは「身近な事柄を扱う短い会話を理解できる段階か」、リーディングでは「説明文から必要情報を取り出せるか」といった具体的な力を把握できる。これにより、教師は生徒の強みと課題を的確に把握し、学級全体の方針と個々の支援を組み合わせた指導計画を設計できる。

また、スコアが合格・不合格ではなく段階的に示されるため、生徒自身が「自分は今ここにいる」と現状を受け止めやすい。学習の出発点を客観的に認識することは、教師にとっては指導計画の基盤となり、生徒にとっては「次にどこを伸ばすか」という自己目標を立てる契機となる。TOEFL Primary®は、小中接続期における診断と目標設定を一体的に支えるツールとして活用できる。

4.2. 中学校卒業時までの英語指導のあり方

入学時のTOEFL Primary®スコアを起点に

据えることで、卒業時に到達すべき英語力を明確に描くことができる。例えば、入学時にA1レベルの生徒を卒業までにA2から場合によってはB1に到達させるといった目標を設定すれば、必要なステップを逆算し、学年ごとに重点を置く領域を割り当てることが可能になる。このような年間配分の設計は、学習指導要領が重視する「系統性のある指導」とも合致し、英語教育を単発的な授業の積み重ねではなく、長期的な学習プロセスとして位置づけることを可能にする。

学習の進展を把握するためには、年1回の定期的な測定(例：中1入学時・中2終了時・中3卒業前)が有効である。こうしたサイクルを確立することで、教師は進捗を客観的に確認し、必要に応じてクラス編成や補充課題・発展課題を更新できる。また、生徒自身も「毎年の成果」を国際基準で振り返ることができ、努力の継続につながる。

このときLexile指数は、各学年末での「集団的な指標」として活用できる。例えば、平均Lexileや分散を確認することで、翌年度に

扱う教科書本文や補助読本の難度を調整することが可能となる。平均値が本文を下回っていれば基礎教材を充実させ、上回っていれば関連する発展教材を提示するといった対応で、教材と生徒の読解力を適切にマッチングさせられる。

このように「診断→授業→再診断」という

循環を確立することは、児童・生徒の学習を継続的に支えるだけでなく、学校経営の観点からも学力保障の実効性を高める。定期的な測定に基づいた説明は、教育委員会や保護者に対する説明責任を果たすうえでも有効であり、学校全体の信頼性を高める基盤となる。

5. まとめ

本稿では、学習指導要領が掲げる「英語を理解し、活用する力」を育成するために、TOEFL Primary®のスコアを教育現場でどのように活用できるかを検討した。小学校から中学校への接続を見据えた英語教育においては、児童・生徒の現状を客観的に把握し、次に伸ばすべき方向を明確にすることが不可欠である。そのためには、合否による一律の判定ではなく、段階的な伸びをスコアで確認できる評価が有効である。TOEFL Primary®は、リスニングとリーディングを中心に「どの場面でどの程度理解できるか」を国際基準に基づいて測定できる点で、学習指導要領の理念に合致する有力な手立てである。

また、スコアレポートに併記されるCEFRレベルやLexile指数は、授業計画や教材選定をより精緻化するための実践的なツールとなる。Lexile値をもとに教科書本文や補助教材との難易度を調整すれば、生徒一人ひとりに適した学習環境を準備できる。さらに、定期的な受験を通じて「診断→授業→再診断」というサイクルを確立することは、教師の指導改善を支えるだけでなく、学校全体の教育成果を保護者や教育委員会に示すうえでも大きな意味を持つ。

TOEFL Primary®の意義は、単に学力を測定することにとどまらない。生徒は自分の成長を可視化し、次に向けて努力する勇気を得る。教師は客観的データをもとに授業改善を進め、学校はカリキュラム全体の方向性を検証できる。保護者にとっても「確かに伸びている」という安心感が生まれ、学校との協力体制が深まる。こうした多方面での効果が重なり合うことで、英語教育は「知識の習得」から「学びの成長実感」へと進化する。

今後さらに多くの学校でTOEFL Primary®が活用されることで、児童・生徒が「できるようになった」という実感を持ち、教師が「よりよい授業へ」と改善を重ね、保護者や地域社会が「確かな成長」を共有できるようになるだろう。その積み重ねは、学校教育をより確かなものとし、子どもたちが国際社会に自信を持って羽ばたくための礎となる。TOEFL Primary®のスコア活用は、英語教育に新しい可能性を拓く希望であり、教育の未来に向けた展望を示すものである。

参考文献

- Hsueh-Chao, M. H., & Nation, P. (2000). Unknown vocabulary density and reading comprehension.
- Laufer, B. (1989). 25 What Percentage of Text-Lexis is Essential for Comprehension?. *Special language: From humans thinking to thinking machines*, 316.
- Wainwright, A. (2001). 親子ではじめる英会話絵じてん. 三省堂.
- 相澤一美. (2010). 語彙知識と英文テキストの理解 高校上級用読解教材選択の指針を求めて. *教材学研究*, 21, 7-14.
- 羽鳥博愛. (1982). 心理言語学と英語教育. 大修館.

著者紹介

今西 竜也

所 属: 京都教育大学附属京都小中学校 英語科主任
学 歴: 京都教育大学大学院教育学研究科修了
在 籍: 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程、英語教育の研究
編集協力: 三省堂 クラウンジュニア
資 格: ETS公認TOEFL Primary® /TOEFL Junior® トレーナー
メタメトリックス公認レクサイルエデュケーター

